

連載　（供覧）いはひまつりのみち

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす  
世界平和のための祭祀を復興させる

## 第十九回　本能による祭祀と理性による宗教

南出喜久治（令和7年6月1日記す）

ちちははと　とほつおやから　すみめおや　やほよろづへの　くにからのみち  
(父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道)

本能と理性の相違は、後に詳述しますが、祭祀を行はうとする動機は、本能を強化することによって獲得されるものです。合理主義からすれば、祭祀といふものは、理性といふ計算原理からして全く無用の行動です。ありがたや、かたじけなやといふ感謝の祈りを捧げても、合理的な生活には何の利益ももたらしません。そのために、理性によつて祭祀を無駄なものとして遠ざけることになつたのです。

本能とは、生得的（先天的）であると学習的（後天的）であるとを問はず、大脳の思考過程を経ない機序であると定義しますと、祭祀を行はうとする動機は、反射的、直観的なものです。

祭祀とは、神靈を招き、神人共食によつて一体化する営みを意味してゐます。大嘗祭は、天皇祭祀の典型なのです。祭祀の儀式や作法は大脳を経たものですが、祭祀の中心は、誓約（うけひ）です。誓約とは、初めに登場するのが記紀に出てくるアマテラスオホミカミとスサノヲノミコトとの「うけひ」であり、これは神意を伺ふためのものでした。それが、神と人との交流についても「うけひ」となり、人が命懸けで神意を求めて、これに神が応へるといふことになります。

明治時代に熊本で起こつた敬神党の乱（神風連の乱）は、国学者の林桜園に師事した門弟らが、この誓約（うけひ）に従つて蹶起し、滅びの道を選んで後世にその心を伝へ続けることになつたのです。

この誓約（うけひ）とは、「受け靈」であり、大脳半球による理性的な思考過程によつて導かれるものではなく、まさに本能的な直観の領域なのです。

惟神の道（かむながらのみち）といふのも、神代から伝はつてきた神慮のままで人為を加へない古来の道である古神道のことですが、仏教伝来によつて宗教化した神道のことはありません。惟神の道とは、すなはち、祭祀の道のことです。